

プレミアム『フライ』デー

巫夏希

じめじめとしたある暑い日の事だった。

時刻は午後六時半。もう既に退社しており、地下鉄に乗り込んでいた。

でも、目的地は——家の最寄り駅ではない。

「……腹減ったなあ」

スマートフォンを見ると、メールが数件来ていた。そのスマートフォンは会社から借り受けたもので案件も僕が対応しないといけないものではない。だから別に気にすることではない。

けれど、上司は常にすべてを把握しておけ、というのがモットーだと言っていた。絶対本人もそこまで把握していかないだろうに、よくそこ

まで発言出来るな、と思っていたけれど、やっぱりこの会社はどこかおかしい——なんてことを思い浮かべるまでそう時間はかからなかった。

「まあ、いずれにせよ」

そんなことは気にしたら負けだ。

とにかく今は美味しいご飯を食べることが出来れば、それでいい。

そう思ってた俺は、地下鉄を降りた。



栄。

名古屋にある一大繁華街。

とはいつても、俺はこの街が嫌いだ。あまり使う機会がないからだ。この街に抱くイメージと言えば、歌舞伎町と銀座が合体したような……どこか雑多なイメージだ。ある程度離れているとはいえ、やはりどこか雑多な感じがするのは否めない。居酒屋が多いし。

そして俺が今向かっているのは——居酒屋ではない。

酒は飲める口だ。けれど、仕事で酒を飲むときは大抵愚痴のはけ口にされるから、最近はあまり酒を飲むタイミングはなかった。だから、実際の所、その飲み代は美味しいご飯を食べるために使われるわけであつて——。

「着いた……」

百貨店の裏手にある、小さなお店。

目的地は、そこだった。

小さい引き戸と、ショーウィンドウには何もメニューが無い。とても小さなお店であることは理解できるだろう。でも、小さい看板にはその店の看板メニューがイラストで描かれているた。

カツ丼。

井物といえればけっこう油がきついイメージがあるかもしれないけれど——それでも、このお店をそのイメージだけで忌避するのは間違っている。もしそういう人間がいるなら、いいから一度食べてみてくれと言ってみたいくらいだ。引き戸を開けると、じゅうじゅうとカツを揚げる音が耳に入ってきた。

「イラシャイマセー」

片言の店員が声を掛けてくる。カウンターとテーブルがあるが、テーブルは腰掛けるには少々狭い。ぶっちゃけてしまうと楽になって食べ

るなら二階の座敷に行けばいいのだけれど、それは一階が満員にならないと案内されない。

そういうわけで俺が案内されたのはカウンター。まあ、別に悪くない。カウンターから見える調理風景を眺めるのも、乙だ。

「ご注文は？」

片言の店員が俺に問いかける。

注文はもう既に決まっている。そう思って、俺は告げる。

「味噌カツ井と……、蜷の味噌汁をひとつ」

「カシコマリマシター」

そう言つてカウンターの奥へと消えていく店員。

この店は少なくとも三十年近く前からこの場所に店を構えている。なぜそんなことを知っているかと言えば、それは俺がこの店を知っている理由にも繋がってくる。

この店は、両親が新婚旅行で行った店だ。俺が名古屋に転勤になった時、その話をしたところ、その店の話をしてくれた。さすがに二十年以上昔の話だったため、店の場所までは覚えていなかったようだが、店の名前だけは覚えていたように教えてくれていた。

というのもこの店はちよくちよくテレビで取り上げられるほど有名なお店だからだろう。

「失礼します」

先ずは沢庵とおしぼりが渡される。一緒に来るのでは無く、出せる順番があるのだろう。それを何回か来て熟知してしまった。常連、といえるほど来ているのかどうかは正直怪しいところではあるのだけれど。

じゅうじゅうと聞こえるカツを揚げる音。

さくさくと聞こえるカツを切る音。

店に居る客は俺だけだったから、その音は今

俺だけが聞くことの出来る音で、それはどこか何かしらの優越感にも似ていた。

「お待ちせしました」

気付けば、俺の横には店員が立っていた。

手に持っているのはお盆。そしてそのお盆に載っているのは、どんぶりだった。

そのどんぶりを見て、俺は思わず涎が出そうになってしまった。

店員はどんぶりをカウンターに置くと、そのまま去って行く。

「お待ちせしました」

少し遅れてカウンター奥に居る男性——ずつとカツを揚げている——が言った。片言ではなく、流暢な日本語で。

さて、改めて僕はどんぶりを見つめる。

そこに広がっていたのは、山だ。

どんぶりの上には、四等分に切られたヒレカ

ツがこれでもかと大量に盛り付けられている。しかもそのカツはただのカツではない。味噌仕立てのソースにつけ込まれた味噌カツだ。

味噌カツ。名古屋に来るまで食べたことは無かったけれど、この数年で虜になってしまった。味が濃いものばかりだったけれど、案外昔からそういう料理を好んできたためか、名古屋の味噌は俺にとっても馴染んだ。

真ん中には火山に満たされたマグマよろしく卵がおかれている。そしてその卵は半熟で、いつ噴火させてもおかしくない状態だ。

「いただきます」

俺は小さくそう言うと、思い切りそのカツにかぶりついた。

味噌カツはソースにつけ込まれているにもかかわらず、さくさくと揚げたての食感だった。

そして濃厚な味噌の味が、食欲を増進させる。

味噌カツの味噌はただの味噌ではない。甘い味噌——とでもいえばいいだろうか。ただ塩気のある味噌ではなく、甘味も含まれている。だからこそ、食欲増進に繋がるし、このカツがしつこく感じないのかもしれない。

ご飯も味噌のソースがしみこんでいて、これもまた美味い。カツとご飯があつてこそこのカツ井とはこのことを言うのだ、という再認識をさせられる。

幾枚かカツを食べたところで、俺は卵を箸でつついた。

そして味噌カツ山は噴火した。

黄身は味噌カツ山を流れ落ち、地面のご飯にしみこんでいく。これによって味に変化が生まれていく。まろやかな味、とでもいえばいいだろうか。いずれにせよ一度で二度楽しめる、というのはとても面白いし、食べてて飽きない。

蜆の味噌汁についても、ゴロゴロと入っている蜆の実を取り出して食べるその瞬間がとても好きだ。味付けは非常にシンプル。まあ味噌カツ井を食べる合間に食べるから、これくらいシンプルなものもいいのかもしれないけれど。



そんなわけで。

一人で食べる食事だから別にそんな時間をかけるわけも無い。

十五分もすれば食べ終わり、熱いお茶で一息吐く。

がらがらと引き戸を開ける音が聞こえる。二人組の外国人が入ってきた。金曜日だし、名古屋の観光に来たのかもしれない。だとしたらとてもいいチョイスだと思ふし、外国のガイドブ

ックにも書かれているのかもしれない。

会計を支払って、俺は外に出る。スマートフ  
オンで時刻を確認すると、七時半。

そういえば今日は新刊の本が発売されるな—  
—とふと思ったそのとき、俺の中で何か考えが  
浮かび上がった。

それはこの店を見知った理由にも繋がってく  
るわけで。

「……たまには、連絡を入れてみるか」

そう思って、俺はスマートフォンの電話アプ  
リをタップした。

何が変わるとは思わない。

何も変わらないし、寧ろ悪化するかもしれな  
い。

けれど、たまには話をする事だって悪くな  
い。そう思う、プレミアムフライデーの夜だつ  
て、あっても良いと思う。

そうして俺は、夜の雑踏へと足を踏み出すの  
だった。

終わり